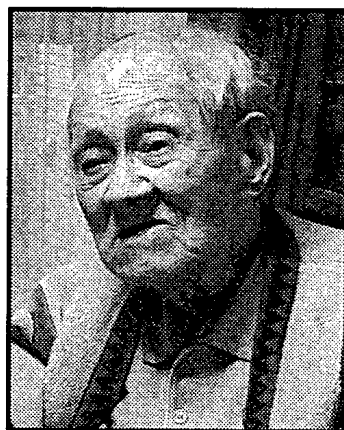


小林正之先生のご逝去を悼む

大内 宏 一



本会の会長を務められた名誉教授の小林正之先生が、本年四月一日に九十七歳で永眠なされた。

ご退職に当たって『史観』第九十四冊に寄せられた、「過去を葬るの記」というじつに先生らしい文章の中で、先生は、「信仰的、イデオロギー的、党派的なものには総じて懐疑的だった」と記しておられる。熱心なメソジスト信者であるご両親のもとで育ちながら途中から信仰に疑いを抱くようになり、戦前は戦争に向かって突き進んでいく「時局的」な動きに対して、そして戦後は無節操に「民主化」の波に迎合する人たちや、ルールを無視する学生運動に対して厳しい目を向けられた。「時流」に抗しながら自我を確立して貫かれた先生のお姿が浮かび上がってくる。ユダヤ史という日本では未開拓に近かった分野に先生が進んで取り組まれたのも、そのような先生の姿勢と深いところで繋がっていたのだろう。学部在学生時代の私にとって、小林先生は、「先生の先生」に当たる近づきたい存在だったが、学年末試験では驚いた。演習で読んだテキストを提出するか、ノートを提出するか、試験を受けるか、どれかを選べとおっしゃる。汚い書き込みのあるテキストを提出してお茶を濁したのだが、大学の先生とはこういうものかと再認識させられる思いだった。卒業論文では副査になってくださったが、戻ってきた卒業論文を見てやはり驚いた。あちこちにびっしりと青鉛筆でコメントが書き込んである。とくに先生が共鳴してくださった箇所にはその旨が記してあった。嬉しかったし、それなりの自信も湧いてきた。

ご退職後も、お会いするときにはいつでも小林先生は私にとっては「先生」であり、また先生ご自身も教育者として対して下さっているという印象を受けた。その一方で、丹念にメモをとりながらメモが増えすぎてその所在が分からなくなってしまうという「メモ魔」ぶりや、会合の開始時間を失念されて電話してみるとまだご在宅といったことを経験して、勝手ながら先生の「人間味」に親しみを感ずることも少なくなかった。

晩年の先生は車椅子生活を余儀なくされたが、葬儀に際して流された、先生が大好きだったというカザルスの「鳥」を聴きながら、先生が大驚となって飛翔しながらこの世を睥睨されているような思いがした。合掌。